

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

っ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

ゲームボーイが僕を救ってくれた！

＜私のニューヨーク物語②＞

私の在外教育施設の派遣先であったニューヨーク補習授業校は、その規模、歴史ともに世界の補習授業校では1，2の存在で、私の赴任当時、1000人超の幼・小・中・高校生を抱えており、校長1名と教頭3名がマネジメント要員として日本から派遣されていました。教頭はそれぞれ3つの地区校を現場責任者として任せられ、校長が全体の統括です。

補習授業校は日本人の教育を主とするものですが、在校生には様々な家庭の子弟がいました。大きく分けると、両親ともに日本人または片方の親御さんが日本人(ハーフ)の永住組、そして、日本から仕事の関係でやってきた駐在組です。

特にニューヨークは、人種の坩堝(るつぼ)と言われている通り、永住組は、担任の先生方や保護者の中にも様々なバックグラウンドをもつ人がたくさんいました。

一方で、日本の民間企業や政府関係機関等に勤務する駐在員にとって、自身の子どもの教育に関する選択肢は、大きく次の3つに分かれます。

① 日本人学校に在籍

日本にいる場合と同等レベルの日本の教育を望んでいる。特に、小学校から中学校へ、中学校から高校への受験期を近い将来に控え、帰国してからの進学を考えると、日本と変わらない学校生活や日本語による指導の方が望ましい。また、在留期間がある程度短期間(長くても2年未満)とあらかじめわかっている場合。

もう一つは、現地校(アメリカの学校)に入れたとしても適応が難しいと判断。あるいは一旦現地校に入れたが、言葉の問題も含め適応ができなかった場合。

② 現地校（アメリカの公立校）＋補習授業校に在籍

現地校は、外国籍の子や特別支援への取り出し授業などを含むサポート体制が、日本より格段に手厚い体制が備わっていることもあり、せっかくアメリカに来たのだから、現地のアメリカの学校に子どもを通わせる。ただし、いずれ日本に帰国して日本での生活が主となるので、そのために日本の勉強もしておく必要があるし、日本の教育文化を味わせておきたい。よって、平日は現地校、土曜日は補習授業校に通うという二本立て。

③ 現地校のみに在籍

平日（月～金）の現地校のみに通う。補習授業校等の日本の教育に準ずる教育施設には通わず、家庭教師、民間の塾で日本の勉強をカバー。あるいは自学（家庭学習）で対応。

私の担当する地区校は、いわゆるたくさん日本人駐在員が居住する地域に位置していた学校でしたので、当時、全校の幼児・小中校児童生徒の約7割を、上記②に該当する駐在組の日本人家庭の子が占めていました。では、それ以外の3割程度の子どもはというと、いわゆる永住組です。両親のどちらかが日本人のハーフの子ども、または両親ともに日本人だがアメリカで生まれアメリカ国籍の子たちでした。

補習授業校は、日本語で日本の授業をするところであり、決して日本語の語学学校ではありません。しかし、永住組の家庭は、日本人である片方の親または両親の意向が強く働き、子どもには、少なくとも日本の新聞が読めたり、日本にいるおじいちゃんおばあちゃんと日本語で会話ができるレベルの日本語力や日本語の学力をつけさせたい、運動会等の日本の教育文化を体験させたい、日本人としての identity を感じてほしい、という様々な理由で、子どもを補習授業校に入れる場合も多いのです。

私自身は、アメリカに行ってすぐに、小3の息子と年中の娘を、アメリカの現地小学校、現地幼稚園に問答無用で入れました。そして、アメリカでの生活に慣れ始めてから、加えて自分が教頭を務める補習授業校にも通わせました。

もちろん我が子も英語は全く喋れないので、子どもにとっては酷なことだったかもしれませんが。特に渡米直後は、日本での仲の良い友達との別れも加わって、親の想像以上に子どもたちは相当せつなく不安な日々だったに違いありません。

アメリカの現地校での、外国籍の子への英語の取得をはじめとする特別な子への学習支援体制が手厚く充実しているのはとてもありがたいことでしたが、渡米間もない頃は、全く言葉が通じずコミュニケーションがとれないことや文化の相違から、度々クラスの子とトラブルになり、いじめられたりして、子どもも我々親も悩み苦しむ日々が続きました。

夕食では、特に長男が、毎晩これまでにないくらい大量の食事を摂ることに驚いていましたが、それがストレスからくる過食であるということも後から気づきました。

しかし、しばらくすると、現地のアメリカの子どもたちと少しずつ仲良くなるようになったのです。彼を窮地から救ってくれたのは、何と「ゲームボーイ」でした。

「ゲームボーイ」は、アメリカで通称「NINTENDO」と呼ばれて親しまれ、アメリカの小中学生たちも夢中でやっていました。長男が、たまたまアメリカの子の誰も持っていないゲームソフトを所有していたことをきっかけに、クラスの子がうちに遊びに来るようになり、それから頻繁に互いの家で遊ぶようになったのです。

彼は、ゲームを通じて遊んでいるうちに、少しずつ少しずつ無意識に簡単な日常会話が身につき、やがて1年もすると、完全に現地に溶け込むようになったのです。

話は変わりますが、周囲には同じように日本からの駐在員の子がたくさんいましたが、実は、英語に早く慣れる絶好の機会は「遊び」なのです。英語を覚えるのも仲良くなるのも「遊び」からです。特にスポーツが得意な子は英語の上達も早いと言われています。

バスケットでも野球でも、技術が優れていれば周囲から一目置かれる存在となり友達から話しかけられる頻度も格段に多くなります。そもそも、運動が得意な子はコミュニケーション能力が高い傾向にあるとも言われています。

一方、日本の学校で比較的勉強がかなり優秀だった子が現地校で不適應になるケースも往々してあります。優秀であるがゆえのプライドが邪魔をして、適当に単語を並べて自分の方から英語で話しかけてみようなどと能天気と考えられずに、完璧に自信が持てるまでは、実践、つまり、自分の方から英語を話して試してみようなどと思わないのです。

そういった状態がずっと続くと、周囲の現地の子からは、この子は自分からコミュニケーションをとりたくないのだと判断されて、いずれみんなから話しかけてもらえなくなり、負のスパイラルに陥るのです。

スポーツであれ、芸術・芸能であれ、趣味であれ、遊びであれ、夢中になるものがある、得意なものがある、そして、恥をかくことを恐れない、誰に対してもどんな状況でも物おじしない、「とにかくやってみよう」の精神が重要なのだとつくづく感じます。

私の息子の近眼を君のせいにしてバカにしてばかりいたけれど
あらためて君に心から謝るよ。

見くびってごめんよ、世界のゲームボーイ君。